



12

島崎藤村は鷹外や漱石とは違って、東大出身でもなかつたし、官職に就いたこともなかつたので、純然たる野の文学者であり、少くとも明治時代には、その生活が苦しかったと考えられる。

藤村の結婚したのは明治三十二年、信州の小諸義塾に赴任してからであって、以来、三十八年迄、小説家に転向しようとして、専ら短編小説や隨筆的な小品によつて習作の道に励んでいた。詩人としては生活が立てられないことと、新体詩の行き詰りを洞察していたものもある。

この頃の藤村の月給は二十円であったとされるが、研究書によつては十五円であったと記している。

明治三十八年の春に、藤村は「破戒」の草稿も大体目録がつき、中央では自然主義文学の論議が盛んになつた。

神津猛は未だ親がかりの身であることを、四百円であった。

この金は當時小諸の神津銀行頭取の息子である。